

VIROSAT-2000 Report, NOAA/NESDIS, Washington D.C. 38 pp.
 Smith, W.L., G.A.M. Kelly, 1985: Use of Satellite Imagery and Soundings in Mesoscale Analysis and Forecasting *ESA Journal*, 85/2, 115-124.
 Strong, A.E. and E.P., McClain, 1984; Improved Ocean Surface Temperature from Space-Comparisons with Drifting Buoys, *Bull. Amer. Meteor. Soc.*, 65, 138-142.

Velden, C.S., W.L. Smith, M. Mayfield, 1984: Application of VAS and TOVS to Tropical Cyclones, *Bull. Amer. Meteor. Soc.*, 65, 1059-1067.
 WMO, 1984; FINAL REPORT ON THE THIRTEENTH MEETING OF COORDINATION OF GEOSTATIONARY METEOROLOGICAL SATELLITES, 10-13, April, 1984.

素顔 '87

(1)



新たなリーダー J.M. Wallace

全米の中でも一、二を争う Washington 大学の気象学教室を支えている J.M. Wallace に聞いてみました。

問：まず学生時代の事を教えて下さい。

—1962年に、船舶工学（船の設計）を卒業し、MIT に移った。

問：何故、気象学を選んだのですか？

—子供の時から、天気に興味があったのだが、1958年当時には、気象学には職がなかった。そこで、船舶工学に入った。ところが、1960年に、気象学の職が大幅に拡大したために、大学院では、気象学にコースを替えた。

問：その時の adviser は誰でしたか？

—最初は、V. Starr だったが、Newell にも大変世話になった。その頃、Faculty としては、N.A. Phillips や、Sanders、彼には、Synoptic Meteorology を習いました。それから、J. Charney もいた。同級生には、Dickinson, Gillman, Godd 達がいて、今でも親しく

している。その他、Ogura や、T. Murakami も来ていた。少しあとには、Obasi や、Oort も来ていた。多くの visitor にも恵まれていた。

問：あなたの研究の中で最も誇るべきものは何ですか？
 —今は、どの研究の寿命もそれ程長くはないが、その中でも、teleconnection に関するものは life work と云って良い。

問：気象学のどんなところに興味がありますか？

—Teleconnection. それと、大規模スケールの大気—海洋相互作用。それに、数値予報と長期予報、更に、5—10年程度の気候変動に興味がある。

問：日本の気象学に対してどんな印象を持っていますか？

—非常にすぐれた仕事をしている。Prof. Matsuno を始め、若い人も含めて世界の一流だと思う。もし、日本の政府が米国の政府が我々にしているのと同じ程度に援助すれば、米国と同じ様な成果が出て来るだろう。現状は、余りにも post が少ない。事情は、英国も同じだ。

問：今後、どんな事をなすべきだと思いますか？

—数値予報に関連したこと。当面は、数日を目標にし、その後は、メソ・スケールと長い期間（延長予報、及び、気候の問題）をする必要がある。それと、世界的な環境（地球化学や生物学的なことも含めて）問題もする必要がある。

問：若い人達について何か云いたい事は？

—最近の米国では、若く優秀な人が、他の分野（business など）に流れてしまい、気象学や他の科学の分野に入って来ない傾向にあり、若干、問題だと思っている。

教室主任という多忙なスケジュールの中、時間をさいて快く interview に応じてくれた。同様に、多忙の中でも、研究を続けていることなど感心することが多い。

分かり易く、ゆっくりと話してくれる、親日家の J.M. Wallace の今後の活躍を祈念して、第一回を終了することにする。

(住 明正)